

国際卓越研究大学に向けて



東北大学医学部長
石井 直人

日差しが日に日に柔らかくなり新たな春が訪れました。春には必ず別れと出会いがあり、卒業生は新たな人生への第一歩を踏み出そうとしています。今年の卒業生は、新型コロナウイルスのパンデミックのために様々な制約を受けた学年でした。特に、2020年に入学された保健学科の学生さんは入学してもしばらくは来学することができず、来仙すると今度は帰省のための移動が制限されるなど、大変な新入学生生活だったと思います。医学部の学生さんも、1、2年次から学生生活の全てを部活に捧げていた人も少なくない中、東医体を含む全ての競技活動、部活動が中止・禁止となり、思い描いていた密な青春とは異なる学生生活を強いられたことと思います。このような様々な困難を乗り越えて新たな門出を迎えられたことに、卒業生および保護者の皆様に心からお祝いを申し上げます。

さて、昨年9月1日に永岡桂子文部科学大臣が、国際卓越研究大学の採択候補に東北大学1校だけを選定したことを発表しました。国際卓越研究大学は我が国の研究力復活をかけた一大国家プロジェクトで、採択された大学は10兆円大学ファンドから25年間で数千億円規模の支援を受けることで欧米の超一流大学と同等の規模で研究を行うことが可能となります。これにより、東北大学の運営規模が現在の2倍となり、数倍の研究成果を生み出すことが期待されています。そして、25年先には欧米の大学のように1兆円規模の大学独自基金を保有し、それを資金運用することで自律的に大学を発展させていくことが可能になります。そこに到達できれば、設備投

資や環境整備などを大学独自の判断で自由に行うことができ、教育、研究、診療の自由度と発展性が高まり、理想的な大学をつくることができます。このような大事業であるが故に、採択件数は数校とされており、東京医科歯科大学のように東京工業大学と合併して採択を目指す大学まで現れた訳です。そして、10校が申請していた中、東大や京大ではなく東北大学が唯一最終候補に選定されました。これは本学始まって以来の快挙として諸手を挙げて喜んでいくところです。正式に採択されれば様々な改革を急ピッチで開始しなくてはなりません。全学教育においては、入学後一定期間を英語のみで教育することなど様々な教育改革が計画されています。その狙いは、真の意味で国際的に活躍できる人材を養成し、真に国際的に卓越した研究大学になることにあります。医学部においても国際的に活躍できる医療従事者、医学研究者を養成できるよう様々な取り組みを計画しております。国際卓越研究大学の正式採択は本年秋の見込みですが、創立117周年の2024年が東北大学の新たな門出となることを祈っています。



保健学科棟前に咲く寒紅梅(2月上旬)

保健学科3年次学生 ウェアセレモニー

医学部保健学科では、3年次学生が学内外で行う臨地実習の開始前に「ウェアセレモニー」を実施しています。今年度も医学部学生後援会からの支援により、すべての学生に記念バッジや診療衣が贈呈されました。

看護学専攻（2023年9月5日実施）

石井直人医学部長、浦山美輪東北大学病院看護部長、黒澤一医学部学生後援会会長、本間経康保健学科長から激励のお言葉をいただきました。宮下光令看護学専攻主任から学生代表の佐藤ひよりさんに東北大学医学部の公式ロゴで



ある北斗七星がデザインされた記念バッジが授与され、佐藤さんから決意表明が述べられました。



検査技術科学専攻（2023年9月20日実施）



石井医学部長、本間保健学科長、黒澤学生後援会会長から激励のお言葉をいただいた後、学生一人一人の名前が呼ばれ、代表の須

藤菜々さんに石井医学部長から白衣が授与されました。真新しい白衣に袖を通した学生を代表して、須藤さんから実習に向けた決意表明が述べられました。

放射線技術科学専攻（2023年9月26日実施）

石井医学部長、本間保健学科長の挨拶に続き、東北大学病院診療技術部放射線部門診療放射線技師長の齋政博先生、黒澤学生後援会会長から激励のお言葉をいただきました。黒澤会長、本間保健学科長から学生代表の高橋優花さんへ目録が授与された後、佐々木理桜さんから決意表明が述べられました。



実習の振り返りと今後の抱負

看護学専攻3年 佐藤 ひより

9月から領域別実習が始まり早くも折り返し地点に立ちました。臨床現場に実際に行ってみると、言語的コミュニケーションだけではなく、非言語的コミュニケーションを活用する機会が多くあったため常に五感を働かせる重要性について改めて感じさせられました。退院後も安心・安全な療養を継続できるようにするために、現在の健康状態や心理状態の把握に留まるだけではなく、今後起こりうる不安や変化など先のことを見据えてケアをしていく必要性について感じました。臨床現場を経験することでしか得られない気づきが多くあったため、それらを真摯に受け止め後半の領域別実習も頑張りたいと思います。

検査技術科学専攻3年 須藤 菜々

臨地実習は、東北大学病院の6部門と市中病院で行わせていただきました。初めは不安でしたが、終わってみるとあっという間に非常に充実した楽しい実習でした。

実習で学んだことは、知識や手技などはもちろんですが、技師の検査との向き合い方です。医師がどんな目的でオーダーした検査なのか、臨床症状や前回値からどんな可能性を疑い何を描出すべきかなど、常に沢山のことを考えながら検査を行っていると感じました。技師からすると多くの検査のうちの一つでも、患者さんにとっては人生を変える検査かもしれないという言葉がとても心に残っています。

今後は就職や進学などそれぞれ違いますが、この経験を忘れずに頑張っていきたいです。

放射線技術科学専攻3年 佐々木 理桜

臨地実習では、実際臨床現場でどのように検査が行われているか、患者に対してどのような声かけを行っているかなどを肌で感じることができました。同じ技師でも、治療・MRI・CTなどモダリティごとに、そして病院ごとに仕事内容が大きく異なることも学びました。実際に座学で学んだことを体験することで、さらなる理解に繋がりました。今回2日間に渡ってモダリティごとに実習を行いました。1日目が終わったら復習、次の日のための予習をし、より2日目が充実するよう努力しました。そのため、2日間という短い期間でも多くの学びを得ることができました。来年度の実習も今回で学んだことを生かし、より充実した実習が行えるよう努めたいです。

医学科新5年次学生 医学部医学科白衣式

2024年1月29日、第14回医学部医学科白衣式が星陵オーデトリウム講堂で挙行されました。やや緊張しながらも晴れやかな面持ちの新5年生が会場に入場すると、出席した教職員や保護者から温かい拍手が送られました。

最初に石井直人医学部長から、「医師という自覚をもち、社会の期待に応えてほしい」と挨拶があり、続いて張替秀郎東北大学病院長、浦山美輪看護部長、藤巻慎一診療技術部長から、「患者さんからいろいろなことを学んでほしい」「一緒に仕事をすることを楽しみにしている」といった期待のこもったお言葉をいただきました。

石井医学部長はじめ出席した教授らから学生一人一人が白衣を着せてもらい、代表の山我明日香さん、知久恵人さんの2名が、これまで支えていただいた方々への感謝やこれから始まる臨床実習に向けた決意表明を堂々と述べました。

白衣式で授与される白衣は東北大学のロゴマークが入った特別なもので、毎年、医学部学生後援会からご支援をいただいで購入しています。この場をお借りして会員の皆様に御礼申し上げます。





医学科新5年 山我 明日香

本日は、臨床実習の開始にあたり、私たち新5年生のために、このような式を執り行ってくださり、誠にありがとうございます。今、憧れていた白衣に袖を通させて頂き、本当に嬉しい思

いと同時に、責任の重さに、身が引き締まる思いがいたします。

今年度より臨床実習生は、医師の指導監督の下に医業をすることができる、と医師法に明記され、法的な位置付けがなされました。私たちも白衣に袖を通すと、患者さんからは、医師と同様に見られます。より一層、白衣を手にする事への重み、そして、医師を志す者として、人の命に向き合い、命を救う仕事に携わる責任を感じます。臨床実習生として、ふさわしい自覚と使命感を持って実習に臨みたいと思います。

私たちは、これまで約4年間にわたり、基礎医学、臨床医学、社会医学で、人体の正常な機能と構造、病気の成り立ち、診断や治療について学んで参りました。今までの座学で得た知識を活かし、本日から、初めて実際の患者さんを前に、診察、治療に参加していくこととなります。臨床実習は、患者さん、先生方、病院のスタッフの皆様から、臨床の現場でなければ得られない数多くのことを学ばせていただける、貴重な機会となります。臨床の現場で通用する知識、技術を身に付けるとともに、医療チームの一員として、思いやりの心を持って患者さん及びご家族と接し、医療人としての態度、コミュニケーションスキルを身に付けられるよう、真摯に取り組む所存です。仲間と切磋琢磨し、医学の知識、技術を高めるとともに、人としても成長できるよう、精一杯努めて参ります。

また、私たちは、入学時から新型コロナウイルスの流行下であり、臨床実習に参加できることのありがたさをより一層感じます。これまで学生生活を支えてくださった全ての方々に、心より御礼申し上げます。多くの方々のご協力、ご厚意で学ばせていただいていることを忘れず、感謝の気持ちを持ち、実習に励みたいと思います。

臨床実習生として、ふさわしい自覚と責任を持ち、信頼される、良き医師を目指し、社会に貢献できるよう、日々精進して参ります。

至らぬ点もあるかと存じますが、先生方、病院のスタッフの皆様、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。本日は誠にありがとうございました。



石井医学部長



張替病院長



医学科新5年 知久 恵人

本日は、臨床修練の開始にあたり、このような式を執り行って下さり、誠にありがとうございます。

今日、私たちは医学生として大切な一歩を踏み出します。この白衣を着る

ということは、これまで励んできた基礎医学・臨床医学・社会医学の枠を超え、実際の現場において医療を実践することを意味します。

私たちはこれまで、学科試験やCBTのような形式で、正しい答えを求める学習に励んで参りました。これらの試験は医学の基本的な知識と理解を確実にするためには必要なものでした。しかし、これから臨む臨床現場では、これまでとは異なる種類の問いに直面いたします。それは一つの正解が存在しない、複雑で多角的な問題です。

昨今、個別化医療というテーマが話題になってきています。それは患者さんの遺伝的・環境的・心理的背景を考慮した上で最適な治療を行うことであり、まさに複雑で多角的な問題です。この過程において、一つの明確な答えを見つけることは非常に困難なものとなります。

私たちはこれからの臨床実習を通じて、教科書を超えた学びを享受することとなります。それは、患者さんとの深いコミュニケーション、実践的な臨床判断、そして時には困難な決断を下す能力です。今後の人生において、答えがない問いに直面した際、私たちは自らの経験と知識、最新のガイドライン、そして最も重要な患者さんへの共感と理解に基づいて最善の行動を取れるよう努めることを誓います。

加えて、お忙しい中私たちを受け入れてくださる医師や看護師をはじめとする医療従事者の方々、そして知識や経験に乏しい我々にご協力してくださる患者さんの皆様に大いに感謝し、その期待に応えられるよう真摯かつ積極的に臨床実習に参加することを誓います。

未熟な点もあるかと存じますが、先生方、医療スタッフの皆様には、ご指導ご鞭撻いただきますようよろしくお願い申し上げます。



医学科2年次学生が「東北大学・東北医科薬科大学 合同慰霊祭・遺骨返還式」に参列

令和5年12月8日、仙台国際センターにおいて「令和5年度東北大学・東北医科薬科大学 合同慰霊祭・遺骨返還式」が執り行われ、解剖学実習を終えたばかりの医学科2年次学生が参列しました。午前に行われた合同慰霊祭には、来賓の宮城県、仙台市、医師会・歯科医師会代表者、ご遺族、学生、教職員、東北大学白菊会役員に加え、4年ぶりに白菊会一般会員の皆様が参列して行われました。

この一年間に系統解剖献体及び病理解剖献体に供された142体の招霊を行い、黙祷を捧げた後、東北医科薬科大学医学部長より祭文が告げられました。その後、学生代表、教員代表、東北大学白菊会理事長より慰霊のことが捧げられ、参列者全員による献花が行われました。



同日午後には、学生が司会進行や参列者の誘導・案内等を担うかたちで遺骨返還式を執り行いました。遺骨返還式では例年、受付からお見送りまでご遺族ごとに1名の学生がついて案内役を務めています。

参列者全員で黙祷を捧げた後、2大学3学部の各学生代表から、医学・医療の発展のために篤志献体という選択をされた故人とそのご遺志を尊重されたご遺族の方々へ敬意と感謝を表す言葉が伝えられました。当日は、返還ご遺骨109柱のうち87柱のご遺族が参列され、東北大学医学部

長・同歯学部長、東北医科薬科大学医学部長からご遺骨の返還ならびに文部科学大臣からの感謝状の伝達を受けられました。

参列されたご遺族から学生へのメッセージ（一部）

「普段はもどかしく歩く高齢の母が、背筋を伸ばししっかりと壇上に向かう姿を見て、サポートの学生の方がとても良くしてくださっているのだと感じました。初々しさの中に芯のある瞳をした学生さん。大変な事がたくさんあると思いますが頑張ってください。ありがとうございました」「やさしくエスコートしていただいたお陰で無事遺骨を受け取ることができました。本当にありがとうございました。子供達が笑顔になり、保護者からも信頼される立派なお医者様になられることを願っています」

「人の気持ちに寄り添うことのできる素晴らしい学生さんでした。遠くから参列したことへのお礼を最初に言ってくださり感心しました。そして常にやさしく接してお話もしてくださり、ステージにもサポートしてくださり、一つの不安もなく過ごすことができました。深く感謝しています。未来の医学のため日々頑張ってください」

「実際に解剖なされた学生さんにお会いでき、人間の身体は教科書通りではなく、同じ身体の人もいなかったという言葉に驚きました。解剖はお医者さんになる第一歩なのかもしれないですね。仙台の寒さに負けないよう頑張ってくださいね」

「人のために尽くすという医学の根本を忘れずに信頼される素敵な先生になってほしいと思います。期待しています」「学生さんは臨床医になるか研究の方にするか迷っていらっしゃるようですが、どちらでも人のためになる大切な素晴らしい仕事です。お勉強も大変だと思いますが、体に気をつけてがんばってください！」



医学科3年次学生 2023年度基礎医学修練発表会

2023年12月21日-22日の2日間にわたり、臨床講義棟での現地発表と、海外留学中の学生はZoomを使用したハイブリッド形式により基礎医学修練発表会が開催され、約4ヶ月もの間、各研究室に所属し準備を進めてきた学生による研究発表が繰り広げられました。会の運営は、実行委員会委員長の諏訪隆史さんを中心に、委員長補佐（兼）抄録作成係 島野賢一さん、表彰・会計係 小久保璃奈さん、演者管理・プログラム係 土屋光さん、進行管理係 宮地優和さんが尽力しました。



2023年度基礎医学修練発表会実行委員会 委員長 諏訪 隆史

“standing on the shoulders of giants”という言葉が好きだ。しばしば「巨人の肩の上に立つ矮人」とも訳されるこのメタファーは、12世紀の神学者の書簡の中にそのルーツを見出すことができる。曰く、「我々は彼らよりも、より多く、より遠くまで見ることができる。しかし、それはわれわれの視力が鋭いからでもなく、あるいは、われわれの背丈が高いからでもなく、われわれが巨人の身体で上に高く持ち上げられているからだ」と。その意味するところはすなわち、本来は遠くを視ることができる由もない小人が巨人の肩に立つことで多くを看取ることができるように、新たな発見は先人たちの知見や知識の蓄積があって初めて成り立つということである。

アイザック・ニュートンが書簡の中で好んで使っていたことから人口に膾炙したこの箴言であるが、手元の文献を紐解いてみると、東洋に持ち込まれたのは東洋学者アーサー・ウェイリーによるところが大きい。ヴィクトリア朝の英国に在って源氏物語を英訳し江湖に問うた碩学である卿は、生涯の少なくとも時間を眼の病気との闘病に費やし、医学研究の進展を大いに待ち望んでいたという。

基礎医学修練は、大学の教養課程と基礎医学の講義を修えたばかりの、いわば机上の学問の小型寵児である我々にとって、眼前に聳える研究の世界に続く最初の関門であった。医学部3年生がフルタイムで研究に従事するという全国でもあまり類を見ないこのプログラムの中で我々はフィールドの中に広く対象を求め、先行研究を渉猟し、実験を行い、議論し、思考し、理論と実際を架橋する貴重な経験を得た。

この4ヶ月、我々学生が巨人の肩の上に立ち、遠く医学研究の一端を垣間見ることができたのはひとえに先生方のご尽力のお陰である。先生方や院生、研究者の方々は少なくとも時間を割き、迷える我々学生を指導してくださった。プログラムはよく練られ、医学研究に必要な思考の方法論を味わうことができたように思える。

今日はそんな先生方への感謝を抱きつつ、同級生たちが弁舌を振るうのに耳を傾けながら、さまざまな分野の研究成果を覗くことができるのが楽しみである。

基礎医学修練発表会を終えて

医学科運営委員会 副委員長（基礎医学修練担当） 古川 徹
病態病理学分野教授

基礎医学修練は東北大学医学部のカリキュラム上、最大の特徴と言えるもので、3年生後半の8月中旬から12月中旬までの4ヶ月間、学生が研究室に配属され、研究オンリーの生活を送る期間となっています。まさに、東北大学の「研究第一」を体現するプログラムであり、医学研究がどのようなものかを身をもって学ぶ期間になります。この4ヶ月の間は各々の研究室に1-2名が配属される少人数プログラムの形で、まさにマンツーマンの指導を受けることになり、学生個々が独自のユニークな体験を得ることになります。その4ヶ月の成果を発表するのがこの基礎修練発表会であり、多種多様な研究発表が行われました。基礎修練発表会は全て学生による企画運営により行われ、スケジュールの作成及び発表と質疑のタイムキープによりよくオーガナイズされた形でスムーズに進行しました。学生は同級生にわかるように発表する必要があり、それぞれ内容はまちまちですが、それなりによく工夫されていました。

各発表演題に対して質問も必ずあり、聴講学生は発表内容の理解を深めることができ、発表学生は自分がよく気づいていなかった部分を知ることができたことと思われまます。この基礎修練での経験を活かして、ぜひ医学研究に邁進する医学者になってほしいと思います。（2023年12月）



最優秀演題賞を受賞された皆さん

NIH-Japan Early-Stage Investigator Forum 2023 開催

国際交流支援室 副室長 今谷 晃

令和5年12月14日(木)、星陵オーデトリウムにおいて、英語によるハイブリット形式で開催され、医学科3年生をはじめとする、国内外の220名以上の若手研究者が参加しました。

米国の国立衛生研究所(NIH; National Institutes of Health)は、首都ワシントンDC郊外にある、世界屈指の医療と生命医学領域における研究・政策を担う巨大複合機関です。東北大学とNIHとは1950年代から交流があり、特に2011年の東日本大震災直後からNIHによる復興支援として、国際共同研究の強化のため、シンポジウムの相互開催、また、若手研究者の人材育成のため、ポスドクの留学推進や医学科3年生の基礎医学修練中の短期留学が実現し、より深化した交流を行っております。

コロナ禍後の新たな企画として、今回のフォーラムでは、NIHの最先端の研究に触れつつ、海外での研究ロールモデルを学んでもらいました。

冒頭、石井直人医学部長とゴッテスマン前NIH副所長から挨拶があり、引き続き、NIHで乳癌に関する最先端の研究を展開している2名の日本人研究者から、医学科

卒業後のキャリアを交えながら講演をいただきました。その後、東北大学病院の2名の先生から、NIH留学体験談と進行中のNIHとの共同研究についてお話があり、活発な質疑応答がなされました。最後にキャリア形成に関するパネルディスカッションが行われ、医学科生からも海外で臨床・研究をする手段や意義について質問があり、パネリストから、人脈を構築する重要性や研究に対する創造性の広がりなどのアドバイスがありました。参加した医学部生もNIHでの最先端の研究の一端に触れ、英語の必要性、さらに様々な海外研究ロールモデルを学べ、各々の将来の具体的なイメージができたようです。

今後も、学生の皆さんが、将来、世界をリードする研究者として活躍できるような人材育成を行って参ります。



学生用図書の整備および医学分館について

東北大学附属図書館医学分館長 藤森 研司

附属図書館医学分館は、大学病院の隣に位置する医学・歯学・保健学系の専門図書館です。全面改修リニューアルオープンから3年目でまだまだ新しく、学生の皆さんには日々快適にご利用いただいております。

医学部学生後援会の皆様には、今年度も学生用図書の整備について御支援を賜り、医学科系38冊、保健学科系37冊の図書を揃えることができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。これらの図書は、3階エレベータ前の「新着図書コーナー」で一定期間展示・貸出をしたのち、書架に組み込んで永く保存し利用に供します。

なお、当館ではコロナ禍以降、ネットで閲覧可能な電子ブックの整備にも重点を置いており、現在8,500点以上を取り揃えております。また、購読している外国雑誌のほとんどを電子ジャーナルで提供しており、どちらも館内だけでなく、研究室や自宅からも利用が可能で、多くの学生に活用されています。

さて、この1年ほどは、学生と本との出会いを

サポートする活動にも力を入れております。具体的には、月替わりの図書のテーマ展示や医学に関する読み物のSNSでの紹介、利用ガイダンスでの読書の推奨などを行っています。当館の蔵書は専門書が中心ですが、教養書をはじめ、他キャンパス図書館の蔵書を当館窓口に取り寄せることができるので、この搬送サービスの活用も促しています。

職員一同、今後とも資料の充実および学習環境の整備、サービスの向上に努めて参りますので、引き続きご支援のほどよろしくお願いいたします。



学生受賞情報

サイエンス・デイオブザイヤー 2023 文部科学大臣賞

2023年7月16日に東北大学を会場に開催された学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ 2023（第17回）において、目のふしぎと音の仕組みを音楽で紹介した、東北大学 COI-NEXT「Vision to Connect」拠点-医学生×きょうゆうプロジェクト presents「音楽会と体験で学ぶカラダのしくみ！～声・耳・眼のふしぎ～」が文部科学大臣賞を受賞、その贈賞式が8月21日に東北大学知の館で行われ、医学生チームの新田友海さん（4年）、きょうゆうプロジェクトの宮下琳太郎さん（5年）、北村開志さん（4年）が代表として出席しました。



医学部学生奨学賞

2024年1月11日、医学部一号館大会議室において授与式が行われ、受賞者に賞状と奨学金が贈られました。

- 最優秀賞 頓宮 慶泰（6年）
- 優秀賞 宮原 一総（4年） 吉町 文子（5年）
廣田 嵩人（6年）
- 奨学賞 佐々木祥人（5年） 田島 隆斗（6年）
中野 賢治（6年） 宮本 周（6年）
山崎真瞳子（6年）



令和6年度は東北大学が東医体の主管校に

医学部学生後援会会長 黒澤 一

東日本医科学生総合体育大会（略称：東医体）は、東日本の医療系学生のスポーツの祭典ともいべき大会です。毎年、本学からも多くの学生が参加しています。38大学が持ち回りの主管は、令和6年度は東北大学が務めます。学生達が主体となって運営部を組織し、頑張っています。大会運営の資金は、東医体連盟よりの運営準備金と寄付金から成るそうです。本後援会からも医学部学生会を通して支援する予定です。先日、長陵新聞でも呼び掛けられたようですが、学生達が広く呼び掛けている寄付の窓口を紹介しておきます（<https://forms.gle/HFo9gN34DH5s2EGr7>）。ご芳名の記載の希望等、詳細はそちらのご案内をご覧ください。会員各位の応援は、運営を担当して奮闘する学生達の励みになることと思います。



編集後記

卒業、進級シーズンを迎えました。会員の皆様のお力添えにより、今年度も継続して医学部生のための教育活動支援を行うことができましたこと、心より御礼申し上げます。第28号会報（令和4年3月発行）で中庭のリノベーションについてお伝えしていましたが、昨年12月頃から星陵会館西側エリアの伐採・伐根作業が始まるとまもなく、そこには明るく開放的な空間がうまれました。遊歩道が出来、今後は芝生も植えられる予定で3月



末の竣工に向け着々と整備が進められています。桜が咲く頃には学生達が談笑している姿も見られそうで楽しみです。

- 東北大学大学院医学系研究科・医学部ウェブサイト：
<http://www.med.tohoku.ac.jp/>
- 東北大学医学部学生後援会ウェブサイト：
<http://www.koen.med.tohoku.ac.jp/>
- X（旧 Twitter）：https://twitter.com/tohoku_univ_med
- Facebook：
<https://www.facebook.com/Tohoku.University.School.of.Medicine>



東北大学医学部学生後援会 (PTA) 事務局

〒980-8575 仙台市青葉区星陵町 2-1
TEL: 022-717-7870 E-mail: med-koen@med.tohoku.ac.jp
<http://www.koen.med.tohoku.ac.jp/>